

日制で全員寮生活です。私も一步の外出もなく寮生活をしました。勿論工員から一足飛びに職員（社員）に昇格しました。途中で簡閲点呼があり、青木少佐に教官を命ぜられ、野戦仕込みの訓練を行いました。その結果「誠に優秀な教官である」と村民大多数の前で賞されました。

会社の修練生は四十五日で帰りますが、自分たち四人は絶えず寮生活でした。親が心配して結婚せよとの親戚の勧めで、昭和十八年六月十一日に軍服とモンペで結婚式を挙げました。この時だけは寮から一晩だけ外泊を許可されました。当時といえども誠に厳しい世情でした。

自分もその後、今晩は召集がくるか、今朝は召集がくるかと、奉公袋に遺書と爪・髪並びに郵便貯金通帳を入れていました。後日の判明ですが、前軍需産業の職でいて、銃後の守りに徹しているから、召集免除の手続きが取られていたようです。

妻は残念なことに二十年前に死亡しました。ずっと苦勞を掛けて、これから案をさせてやろうという時に

亡くなりました。

今後は健康に留意し不戦の誓いを子々孫々まで伝えていきたいと思えます。

#### 第四十一師団輜重兵連隊

##### 私の北支那戦記

岐阜県 榎坂 雪 三

大正二年六月十八日、岐阜県飛騨の国分町の農家に生まれた。二男であるが事実上は長男で家を継ぐべき立場にあった。兵隊検査では甲種合格であったが、当時は軍縮の時代でもあったのか、いわゆる「甲種くじ逃れ」で現役兵としての入営はなかった。その時の私の番号は甲種十一番で、十番までが現役の志願兵であったので私は入営しなかったのである。

昭和の初期は、飛騨の多くの若者は男女を問わず、長野県の製糸工場へ働きに行った。私も十七歳の時、長野の塩尻へ出て岡谷を通って諏訪の川岸の工場へ勤



の宮内靴を履いたので、帰る時靴が無い。私が見付け届けたところ「お前が履いたのか」と、廊下の端から端まで両頬にビンタを張られた。見付けた者が責任をとらされたのだから、他人の手落ちでずいぶんひどい目にあつたことになる。

また、私ではないが、厩当番が古兵に馬の鐙あぶらで殴られたり、長い手綱で叩かれ、綱が首に巻きついてしまふのを見たが、鐙の時は兵隊にけがをさせたので古兵で罰になった者もいた。一期の検閲が終わり一等兵になると若干楽になつたし、上等兵になつて清水中尉の馬当番を命ぜられ可愛がつてもらつた。ある時、帰りに馬を走らせ叱られたが、中尉のとりなしで助かつたこともあつた。

外地からの復員部隊の兵隊と一緒に召集解除になつた同年兵も多かつたが、小人数の戦友と共に残り、野戦行きとなり衛門を出たが、当時は戦勝の時の出発であるから、婦人会などに送られ、西瓜などもずいぶんもらった。初めは朝鮮行きとのことであつたが變つて、九州久留米の歩兵第十八連隊に入り、そこで第四

十一師団が編成された。私は駄馬（荷物を馬の背に積む）から輓馬（馬で輻重車を輓く）となり、輓馬の訓練をした。九月末から十月初旬は秋季大演習で、その間は四、五日の間、雨が降り続いた。

十月十五日、門司港出帆、第四十一師団の輻重だけが北支塘沽へ上陸し、他部隊は海が大荒れで朝鮮經由臨汾へと出発した。我々は塘沽で、食糧も無く、馬糧の高梁を食べて一週間過ごした。そのうちに食糧を受領することができたが、その間は手榴弾を河に投げる演習をして、浮かんだ魚を獲つて副食とした。

塘沽から汽車でようやく霍県へ着き駐屯したが、治安のこともあり装具は解かず、その時の笑い話であるが、結婚式の爆竹を敵襲と間違えたこともあつた。

津蒲線で山西省榆次へと北上したが、ここに師団司令部（師団長・田辺中將）を置き、我々は暁廟に駐屯し治安警備に任じ、郷寧作戦に参加した。ここで輻重隊は山に登りかけたが雨のため車が進まず、歩兵や、砲兵の大村部隊について行つたが、ゲリラにやられ一個小隊が全滅してしまつた。

郷寧作戦では日が暮れると、弾丸は少なくなり、体が隠れるだけの壕を掘り、私は中隊長の側で残弾を集めていた。こちらの重機関銃を射つとその所在が敵に知られ、遂に猛射撃を受けて損害を出した。「山」「河」の合い言葉で、曹長以下三人で敵陣をはって抜け、大村部隊に着き援護を頼んだ。大村砲兵部隊は敵に対し集中砲火を浴びせてくれたので、我々輜重隊はやっと助かった。この戦闘で私の上官小林軍曹が戦死された。

その後、臨汾から黄河の北岸まで工兵隊が、発破をかけ道路を作り、橋を架け、そして歩兵が進撃した。中原作戦の時は雨が降らず、風吹けば黄砂で、顔も何も砂だらけ、行軍では輜重は馬に荷物を積むのだが、歩兵は自分の兵器装具を背負って歩くのだから、吸う煙草も持っていないので、分けてやりずいぶん喜ばれたものだ。その時、朝鮮の専売局の上司の女学生から慰問袋をもらった思い出もある。

郷寧作戦の後の戦況について、作戦資料によると、臨汾においては中共軍の勢力が広範囲に浸透して、その活動が積極的かつ執拗となり、治安維持のため、共

産軍殲滅、肅正討伐を繰り返し、戦闘の毎日であった。これに加えて国民政府軍の冬期攻勢も、従来に増してその戦意も盛んであった。我が部隊もいよいよ春季晋南作戦に出動を命ぜられた。主力は平陸、芳津渡付近、一部をもって陌南鎮付近の黄河以北にある敵軍を捕捉撃滅して、占領地域を拡張した。

続いて我が軍は、沢州に向かい攻撃を開始した。沢州方面の戦績は著しく発展している状況であると聞いた。師団主力の一部をもって西南方面に突進させることとなり、敵の退路を遮断することができ、敵は損害を受け、ようやく我が軍の間隙を縫って東南方面に敗走していった。

我が軍は新たに、張馬、心水、陽場と進出し、沢州に主力を駐留させて治安圏拡大につとめた。輜重兵第四十一連隊主力は、この地域より一部の一個中隊山岡小隊をもって歩兵第二三七連隊有富部隊に配属され、輓馬、自動車部隊をもって、間断なく第一線部隊の戦果拡張を支援することができた。

我々輓馬部隊は本作戦の半ばにおいて、第一、第二

中隊を駄馬部隊に改編して、峻険な山地における第一線部隊の輸送に備えた。また、自動車部隊は後方において連日連夜のスピード輸送を敢行した。有富部隊に配属になった山岡少尉以下一個小隊は、急進に急進を重ねて、高地から高地へと突進する有富部隊を懸命に追及した。

残敵を排除しつつ強行突破して、ようやく第一線部隊近くなり、隊員皆がやれやれと思う時、遙か前方に敵陣地を発見、味方兵力の二十倍と思われる敵の攻撃を受けた。小隊長は強行突破は不可能と判断、仕方なく車馬は円陣体型を造り、死角をもって退避させ、輜重の戦闘部隊及び歩兵からの援護隊約三十人と協力して、陣地構築防禦隊形を作成し、機を見て攻撃する決心をされ、静かに夜を待った。

夜に入ると敵の軍勢も迫撃砲を射ち込む。あらゆる手段を講じて輜重の積載物を奪取する意図が見えてくる。この敵に攻撃をした味方には沢山の負傷者が出たのだが、勇猛果敢に敵を追ひ散らしていた。戦闘数十時間、歩兵第二三七連隊の救援を得て、無事任務遂行

ができ、臨汾に帰着した。

続いて付近の警備に着き、師団諸部隊の警備地に対する輸送などに任じており、時の我が中隊長は米田中尉であった。やがて中村儀十郎部隊長から吉松部隊長と交替した。しかし、臨汾周辺の治安は良くなかった。連隊より出している警備隊はしばしば夜襲を受け、特に共産軍との戦闘は熾烈であり、また通信線（有線）の遮断は常套手段であった。

我が部隊は夜間を通じて自動車部隊に無灯火で山麓まで前進させ、夜明けを待って共産軍の根拠地である陣地に奇襲攻撃をしたこともあった。我々輜重は戦闘中の歩兵部隊に武器弾薬を届けるのだが、その後方においても、弾丸は歩兵だけでなく、我々後方にも飛んでくるのであるから、前線も後方も何ら区別なき戦闘であった。

交替された吉松部隊長は、輸送力の増強を図るため、ラクダの飼育を始めた。当初三十頭のラクダを飼うことになり、その訓練を始めた。鼻輪を引っ張ると前足から坐るので荷物を積むのに便利であり、また、馬の

三倍の荷物を積むことができた。そうしたこと、輸送力は増強された。

昭和十六年五月七日より、いよいよ中原会戦へと入り、中央の重慶軍攻撃に入るため、我が占領戦を進める作戦で、いわゆる「百号作戦」に突入せんとするのである。今次は大がかりな包囲作戦で敵の退路を遮断すべく、あらゆる作戦をしたわけで、どうやら遮断に成功した。敵軍は右往左往するばかりで、逃げ場を失い、白旗を立てた。副团长以下一三〇〇人を捕虜とし、兵器弾薬等沢山鹵獲し、多大の戦果を挙げることができた。輜重兵隊が千何百という多数の捕虜を得たことは、日露戦争において一例あるのみで、それ以来の事であると語り継がれている。

部隊としての大戦果と同時に、私が直接体験したことについても加えて話をする。

中原作戦が始まったら郷寧付近は手薄になり討伐にも行った。輜重隊は歩兵部隊について行くのだが、どこへ行っても歩兵がない。行軍途中、山岳にかかると輓馬を駄馬に替え、鞍に弾薬をつけて行く。山と山

との間に土民がいる。自分が食べるだけの畑を作り、土の中に塩や麦やくるみを埋めている。また鶏も飼っている。生活の知恵である。ある部落では住民は全部山の中に逃げてしまっている。特に女はほとんどいない。沢州あたりでは敵が大勢戦死していたのを見た。夜間になると、馬は繫柵を作り休ませ、我々は土の上に乗るのだが、体の下を雨水が流れていることもあった。

このように輜重部隊は直接戦闘の裏方ではあるが、自らで戦うこともたびたびあるし、歩兵や砲兵は直接戦闘するのだが、輜重の任務、戦闘は歩兵等の戦闘部隊に武器・弾薬・食糧・医薬品を支障なく送り届けることが戦闘なのである。

前に申したような大殊勲を挙げた輜重隊は金鷄勲章はもらえないらしい。我々は殊勲乙で甲はもらえないという。部隊は千数百を捕虜にしたが、これを後送するには大きな支障があった。各戦場には日本兵の死骸は一つも無く、皆後方へ送ったり茶毘に付したりして遺骨として各部隊はそれぞれ奉持していた。また、負

傷・傷病兵は患者輸送隊がどんどん後送り病院に收容していた。戦場には支那軍の死骸がゴロゴロと放置されたままなのを見た。戦勝と敗戦の差をまざまざと見て心を痛めた。

昭和十六年の秋になり、戦闘の途中に一部帰還命令が出た。その一部の中に私の名前もあった。広島島の似島で検疫があり、一カ月後、第四十一師団の原隊である宇都宮連隊へ帰還した。私のような召集解除者はわずかであったが、現役除隊者は相当数いた。宇都宮へは四十一師団の軍服で帰ったのだから、戦勝のうちの凱旋のようなものであり、私は弟が迎えに来て日光にも寄らず直ちに故郷の国府町へ帰った。

部落では高張り提灯を立てて迎えに来てくれた。その時、一カ月余りで大東亜戦争が勃発するなど、世界や国内情勢が逼迫していることは肌で感じないわけではないが、まったく寝耳に水、青天の霹靂であった。また、我が部隊が、後にニューギニア戦線においてほとんど玉砕に近い損害を受けるなどとは無想もしなかった。なので、我が身の幸運をつくづく感じたものである。

しかし、私は昭和十七年八月、帰還後半年で、再召集となった。中部第二部隊（名古屋の歩兵第六連隊の後）へ入り、釜山―暉春―師団司令部付から、満州、朝鮮、ソ連国境の輜重隊勤務となった。その後、昭和十八年一月、突如召集解除となった。これは、父も高齢だし、内地の食糧増産上農業従事のこともあったためだろうが、今度は平瀬鉦山（水銀の鉦山）へと徴用となり三カ月間で解除となった。

その後、農業を続け、昭和二十年七月結婚したが、その時、叔父の荷物を預かった。岐阜市は焼け野原、残っているのはコンクリートの建物だけであった。家へ帰る途中、大垣あたりは爆撃され、民家は竹の柱に焼けトタンで屋根を葺き、叔父は防空壕でやられたが、荷物は長良川の対岸に借りていた倉で助かった。また、高山の方に預かっていたものも当然焼けずに残った。我が家族には人的被害はなく助かった。